

ANIMATION

REVIEW

このバランスの悪さ

『ガサラギ』 サンライズ

ゴトチヒ

はじめに

まずは、『ガサラギ』の2005年の段階での、私のレビューをご覧いただきたい。

そこで、『ガサラギ』の問題点を洗っている。

付録として、「2010年代のシミュレーション」を付ける。

『ガサラギ』は面白いか

『ガサラギ』は、1998年にテレビ東京(関東ローカル)で放映された、高橋良輔監督によるアニメである。

私は、このアニメの語りたいところだけ語るが、そうしなければ、まとまるものもまとまらないからだ。

あらすじも、語りたいところだけのエピソードしか書かない。

こういうことを事前にことわらなければいけないのは、『ガサラギ』が『エヴァ』フォロワーだからである。『エヴァ』の一画面の中に情報量を詰め込めるだけ詰め込む手法を使われているがゆえに、説明しなくてはいけないことが多い。あまりにも多いので、まず、何故『ガサラギ』が『エヴァ』フォロワーであるか、語る。

それから、高橋良輔監督やスタッフが影響を受けたと思われる、『沈黙の艦隊』からの影響を語る。

ということをはじめにことわっておく。

『エヴァ』みたいな企画

ここからは、少し推測でモノを書くことを詫びたい。実際の事実とは違うだろうが、この推測に近いことがあったはずである。だが、間違っているかもしれないので、そこについては、先にお詫びをしておく。

まず、ガイナックス取締役である武田康廣の著書から、引用したい。当時のアニメーションを端的に表すことが書かれている。

(前略)「エヴァンゲリオン」の後によく交わされたアニメ企画会議の会話にこんなものがある。「どんな企画内容なの」「エヴァみたいな話です」「そりゃすごい、でもラストはエヴァみたいじゃだめだよ」「もちろん、ラストはエヴァみたいにはなりません」「それなら期待できる」本当の話である。なんせ僕自身が「ラストがエヴァみたいじゃないエヴァみたいな企画、ガイナックスさんできませんか?」と言われたことがあるのだ。

【武田康廣『の一てんき通信』ワニブックス】より引用

あまり、読感を誘導したくはないが、これはひどい話である。

『ガサラギ』は'98放映開始であるから、そこから逆算して企画が通されたのは早くも96年、97年には製作が始まっていたらう。

当時は、前の引用文通り、「ラストがエヴァみたいじゃないエヴァみたいな企画」が求められた時期である。逆にいえば、そういうものしか、企画を通して製作させなかった時期ともいえる。

すでにここから、『ガサラギ』の評価の「難解性を高めて面白さが薄れてしまう」というのは、生まれるべくして生まれてしまったといえる。

この「エヴァみたいな企画」での「エヴァみたい」を器であると例えると、その中に「企画」として入れたのが、『沈黙の艦隊』のシミュレーション性であったと思われる。

97年頃の高橋監督は『沈黙の艦隊III』のOVAの製作を終えている時期であり、『沈黙の艦隊』の政治シミュレーション性が『ガサラギ』の製作に持ち越されたと、私は思う。(メモには、『沈黙の艦隊』に関わって、高橋監督に政治シミュレーション性がこびりついて、『ガサラギ』でそれを塗りたくったと、書いてある)

多分、推測どおりではないと思われるが、こうした背景を持った作品であるから、私は情けをかけたと思う、レビューをしている。

私は「エヴァみたいな」部分を評価できない。だが、「企画」の部分は政治シミュレーション性である。ここがある意味面白いのだが、説明を要する。

それが次の「リアリティーの追求」である。

アニメの中でのリアリティーの追求

今までもマンガや小説にリアリティーを追求した作品はあれど、『沈黙の艦隊』には、80年代から90年代にかけての総選挙の保守分裂を予期したような、選挙戦・選挙結果が出てくる。(夏目房之介『マンガと「戦争」』参照のこと)

政治劇のリアリティーを追求した結果、『沈黙の艦隊』は予見性を持ったのだといえるが(あくまで予見性であり正確にまったく同じというわけではない)、その『沈黙の艦隊』に影響を受けた『ガサラギ』にも、予見性にみちたエピソードがある。

ベギルスタンの独裁政権と西側諸国の緊張がふくらみ、紛争に突入する中、新兵器である局地戦略兵器タクティカルアーマーのベギルスタン内での戦地内試運用を、豪和一族は行おうと画策する。目的は苦戦を強いられた諸外国にTAの戦力を見せつけ、兵器購入を促すためである。しかし、今までTAによる疑似戦闘シチュエーションの訓練をしていた特殊自衛隊では、憲法により戦地に派遣できない。そこで幕僚にTAと従来兵器との軍事演習を見せ、性能差を見せつけるのだが、ときの防衛長官に「特自派遣」を行う法案の議会提出を反対される。そして、国会では「特自派遣法案」が防衛長官の不可解な交通事故(豪和による暗殺)による与党内反対派を抑えた形での法案成立が成る。

これは、第二話から第四話ぐらいまでの「特自派遣」に関するあらすじである(実はこれ以上長いあらすじとなる)。

このエピソードは、目的は違うにせよ、現実の日本のイラク特措法による自衛隊のイラク派遣に近い経緯となっている。

米国主導によるイラク戦争に日本は多額の資金援助を行い、復興支援を目的とした自衛隊派遣も行った。それは国際貢献といった言葉が使われているが、米国の軍事力が来るべき朝鮮半島有事には抜きにして語れないので、米国の期待に副ったと、誰が見てもわかる。

つまりは、日本国政府・内閣は米国という超大国であれ、架空の巨大企業であれ、権力のある(軍事力も含む)組織の意向によっては、フィクションの中とはいえ憲法問題があっても、自衛のみに軍

事力を持った（あるいは持てない）組織を送る(主体性がない)ということである。(私個人は、自衛隊に軍隊として認められることを願っている)

『ガサラギ』は日本政府という政治体制が、ある事態が起こった場合にとる行動、それは独自に決断や解答が出されるのではなく、外的権力組織によってあらかじめ決められているということ、結果として描いている(『エヴァ』などはこれを風刺的に描く)。それを描かなければ、リアリティーを持ち得ないということだ。

『沈黙の艦隊』の政治劇を取り入れ、さらにリアリティーを追求した結果、『沈黙の艦隊』と同じように、政治劇に予見性を持ったのは、必然かもしれない。

しかし、この「リアリティーの追求」はアニメ視聴者に評価されているのだろうか。

もしかしたら、これは評論家になれる人だけしか面白くない、評価できないのではないか。

「イラクに侵攻するアメリカ陸軍の行軍について解説する江畑謙介のつもりになって解説、批評できる人」だけ、このアニメを評価しているのではないか。

また、『沈黙の艦隊』の荒唐無稽性が『ガサラギ』では削がれていて、その中にあった娯楽性をも削いでしまったのではないか。

こうした疑わしい問題を棚上げする。今となっては、検証が難しいからだ。

「リアリティーの追求」は次の項「ユートピアがない」にも関わるのだ。

ユートピアがない

さて、少し『ガサラギ』そのものの話から離れて、戦争アニメの「ユートピア」について、少々語りたい。

不思議なことだが、戦争アニメにはユートピアに主人公が物語の途中、多くは隠遁という理由で立ち寄り、やすらぐエピソードがある。

『今、そこにいる僕』では主人公シュウがララ・ルゥと一緒に逃げて、谷の中の村に身を隠す。そこは農耕民族である日本人が思い描くユートピア、「農耕を営む自活生活圏」である。

たぶん、これは日本人にしか通用しない不文律のユートピア性を表している。

たとえ、都市生活を営む視聴者であっても、伝わるユートピア像ではないだろうか。

前の「主人公がユートピアに立ち寄る」に話を戻すが、このエピソードがあるアニメは、あげればある。『ガサラギ』のメカニカルデザインをした出淵裕が監督した『ラーゼフォン』の主人公が立ち寄るニライカナイはユートピアであるし、『キングゲイナー』はヤージンというユートピアに向かう話であり、『ターンAガンダム』はユートピアを訪れて、「ユートピア宣言」するところから始まる。

これは『鉄腕アトム』の時代(あるいはもっと過去)からある「ユートピアを侵すものを排除する」という倫理観から、逆算されたエピソードである。要はユートピアを侵すものが現れて、それを倒そうとする主人公側にある正義の足場の組み立てが目的である(いわゆる動機付け)。

『ガサラギ』にも、物語の途中で「主人公がユートピアに立ち寄る」に、近いエピソードがあるが、けしてそこはユートピアではない。具体的にいうと、日本的なユートピア像ではない。

そこは不法居留している外国人の根城なのだ。不法入国、不法残留している人々が集まって出来たスラム街、といえいいだろうか。田畑があり、小川が流れ、風が吹き、子供たちの声が聞こえるよ

うなところではない。朽ちかけたビルが立ち並び、道路にゴミが散乱し、淀んだ空気をたたえた裏通りには、失業者か売人しかいないところに、主人公は逃げ込んだのだ。

製作者が意図してというより、リアリティーの追求の結果、「近未来日本にユートピアはない」という現実を見せてしまった。

そう、ユートピアはないのである。

では、ユートピアがない状態で起る戦争で、正義や正当性を持つにはどうしたらよいか。

それは観念を持つことである。

ここで、特異なキャラクター西田氏の登場である。

西田のユートピア創造

この西田氏の姓は多分、哲学者「西田幾多郎」の姓からとられている。(もし、哲学者のテストがあったとしたら、西田幾多郎は西洋哲学と日本思想にパイプを通した、ということ覚えてさえすればいい)

『ガサラギ』は中盤以降、西田の観念の実現のための戦いに移行する。

まず、動機として、今の日本の現状は醜く、見るに耐えないため、自ら刀を持って両目を塞ぐことにより、身体的に「日本の現状を憂慮している」を表す。

そして、観念は侍、武士道による立脚である。彼のセリフ「日本で真に経世済民をしたのは侍だ」というものからも、それが伺える。

少し、「経世済民」について説明をさせてもらう。「経世済民」とはすなわち、世の中をよくして貧困をなくし（経世の部分）、人民をたすける（済民の部分）という意味であり、略すると「経済」となる。わかりやすくすれば、「所得を増やして食糧医療を満足できる体制を作ろう」ということになる(これは「経済政策」の選択肢のひとつ)。

話を戻し進めて、アメリカが世界的な作物の不作を機に「穀物モラトリアム」の発動を宣言するが、日本国内の総資産を使った、マネートレーディング（ポートフォリオ的取引と思われる）による「アメリカ経済操作」を西田(豪和一族)側は行うことによって、「穀物モラトリアム」の発動を食い止めようとする。

そこで問題なのは、日本の資産20兆ドル(作中の試算)を使ったら、アメリカ経済に依存する日本も、アメリカとともに経済破綻が連鎖的に起きるということだ。

だが、それによって、西田の観念、思想は勝利する。西田は日本が近代以前の貧困にあえぐことによって、「武士道倫理の復活」が達成されるであろうと予測できたから、アメリカと対決することを目論んだのだ。

物語の最後近く、アメリカの「穀物モラトリアム」の発動を阻止した西田は、日本の将来について「日本がまず、手本となって軍備撤廃を行って、国際社会に勇気を持って示さなければならない」と語る。

ここでまた、『沈黙の艦隊』『政軍分離』の影響を垣間見るが、私はこれはカント主義だと思う。西田の「軍備撤廃」は、カントの『永遠平和のために』の「永遠平和のための予備条項」の第三条項、「常備軍は、時とともに全廃されなければならない」にそっくりなのだ。

哲学者西田幾多郎は、西洋哲学と日本思想に一本の互いに通る「管」をつくることに尽力した。

アニメキャラクターの西田も、日本的武士道を支えにしながら、西洋哲学者のカントの思想を理想とするのは、モデルであろう人物の影響と考えるのは、邪推だろうか。

さて、先に『ガサラギ』にはユートピアはないといったが、もし、それがあるとすれば、西田の目指した未来の日本こそが、ユートピアである。「西田の観念の実現のための戦い」は、実はユートピア創造の戦いであったのだ。

これは『沈黙の艦隊』よりも、同作家の『ジパング』の物語に近い。

過去の「美しかった日本」、あるいは「あるべき姿の日本」を取り戻したいという欲求が二作品に作用していると思われる。

「穀物モラトリアム」による問題は、さらに「戦争のリアリティー」にも作用している。

戦争のリアリティー追及

「穀物モラトリアム」の話は続く。

この「穀物モラトリアム」はそもそも、世界的異常気象により、米国の穀物輸出制限案から始まる。

穀物輸出は米国にとって国際的政治戦略である。冷戦時、小麦の生産が不作となったソ連に穀物メジャーを通して、穀物を売り与えたのは、その後のソ連崩壊の布石となる(民主化して資本を受け入れなければ、国民を餓死させてしまう)。米国は、これにより「対ソ連カード」に穀物輸出制限を手に入れたのだ。

同じ社会主義国の中国は米国の穀物輸入に警戒感を持っている。米国の外交カードを増やしたくないからだ。

こうした実際にも問題となる穀物問題をとりいれると、物語にリアリティーを与える。日本は米国に穀物を依存しきった体制であり、「穀物モラトリアム」を阻止できるのであれば、したい。

では、何を外交手段とするか。

90年代当時、ヘッジファンドによって起こされる通貨危機が問題であった。イギリスのポンド、タイのバーツが投機の対象にされて売り買いされ暴落し、政府は下げ止まらせるために市場介入するが、一日で外貨準備を使い果たすほど、厳しい苦戦を強いられ、その結果、経済破綻を起す国も現れた。(金利の高かったバーツによる貯金が暴落によって世界中で一斉に引き出された、など)

『ガサラギ』の中でも、同じようにアメリカの通貨や株式を暴落させるマネートレーディングが準備される。

この経済操作の差し止めの交換条件が「穀物モラトリアム」の日本への免除である。米国内のみでも穀物不足が深刻化するであろうから、これは飲めないと米国大統領は判断し、武力行使によるトレーディングセンター制圧の作戦を実行する。(事実上の安保条約の反故は『沈黙の艦隊』でも描かれた)

もちろん、視聴者である日本人はアメリカが局地戦兵器を投入して、制圧するのに納得がいく。何故なら、アメリカをよく知っているからだ。

これらのことでわかるのは、経済問題が戦争の引き金になるということだ。

他のロボットアニメ『ガンダム』を例にとれば、ジオン公国が戦争を起したのは、政治体制の成立

や宇宙民(スペースノイド)の独立のためであった。そこから、さらにリアリティーを追求すると、主義主張の違いが生む動機よりも、経済の維持または拡大のための動機の方が、リアリティーがある。実際に、太平洋戦争は米国の経済封鎖が日本の経済停滞をまねいて始まったことであり、先のユーゴスラビアのコソボ紛争も、ヨーロッパ文化圏でありながら、欧米の生産物を消費する消費者になれる国民が独裁者がいるために阻害されているため、NATOは国連の採決なしで武力行使にふみきったと見ることもできる。

アメリカのTA(タクティカルアーマー)の投入を予期していた、豪和側は同じくTAの部隊、特殊自衛隊に防衛を行わせる。(拠点制圧のみを目論んだTAの投入は空爆を行うと国際世論の反発を招くからと思われる)

特自側はアメリカのTA部隊に勝つ。

その際、特自の隊長は「やった、俺たちはアメリカに勝った」と、抑えた演技だが、言う。(これも『沈黙の艦隊』の影響と思われる)

制圧失敗を伝えられた大統領は、ホットラインでこの戦いの首謀者、西田と電話会見し「穀物モラトリアム」の免除を約束する。(報が伝えられるまで、シチュエーションルームで待ちわびるシーンがないのが残念だ)

会見後、西田は言葉を残し、その場を離れて休むが、言葉の隠された意味通り、自刃する。

物語は西田の死によって、潔く終われなかった。

この「穀物モラトリアム」編を編集して、『エヴァ』的要素を取り除けば、『ガサラギ』もけっこう面白いのではないかと思う。

総括

突然だが、TAに乗るときのヘルメットの話しよう。

そのヘルメット内部に、小型モニターが備え付けられ、暗視スコープや背面などの死角をおぎなう映像を見ることができる(『パトレイバー』の零式の映像による間接視認の延長)。また、モニターを機体内部に配置しないということは、その分、装甲を厚くでき、TAが思ったより小型なのはこのためである。

いいアイデアである。

『ガサラギ』はこういった、いいアイデアを積み重ねて造られている。

『沈黙の艦隊』をいい教科書として、練り上げられた政治、戦争シミュレーションは非常に面白いと思う。

ただ、『エヴァ』的要素が問題で、ヘルメットなどのアイデアが奉仕する先は、やはり『沈黙の艦隊』的要素だと思う。

しかし、『エヴァ』的要素は物語に「引き(続き)」の役目を果たしているから、全て悪く言うわけにはいかない。二足歩行の兵器を歩かせる人工筋肉は、超科学の側にあって、これが鬼の身体の一部であることはいうまでもない。鬼は『エヴァ』的要素のキーになるものだから、外せない事実には私は思わず唸ってしまう。

TAを立たせるためには、『エヴァ』的要素が必要なのである。

『ガサラギ』が過小評価されるのは仕方ない。

『エヴァ』のように「何だかんだいって面白い」というわけではない。

この点の問題は、はじめの、「ラストがエヴァみたいじゃないエヴァみたいな企画」に尽きる。だが、アニメ制作会社も会社組織であって、経営をしていかなければならない。たまに、「流行しているものの企画」を制作する。それを私は非難しない。とても重要なことだからである。

『エヴァ』的要素を語らなかつたことに少し後悔もある。しかし、『沈黙の艦隊』の影響と類似と発展した思考をレビューテーマに選んだのだから、これはいたしかたない。

最後に、『ガサラギ』は『沈黙の艦隊』との関わりを私は面白いと思い、評価する。

以上、である。

備考

2005年3月頃にしたレビューに誤字脱字を修正

付録 2010年代のシミュレーション

本放送から10年以上経ち、レビューを書いたのも、五年ほど前であった。

その五年間で江畑謙介さんは亡くなられ、イラク戦争は泥沼化し、ジャスミン革命が起きた。

基本的に、『ガサラギ』の評価は今でも変わらない。『沈黙の艦隊』の補助線を引かないと、「面白くもなんともない」。

しかし、奇しくも2010年代の問題をシミュレーションする結果になっている。

TPPの問題は、穀物モラトリアムとリンクする。わりとリアルな問題と考えた方がいい。

実際にオーストラリアの大洪水で世界全体の小麦収穫高が下がると、小麦の相場価格は上がるし、米の中央銀行がマネーサプライ(通貨供給)をすると、めぐりめぐって投機マネーが穀物高をもたらす。

先行する評論家を批判するのは、後出しジャンケンのように簡単だけど、あえてすると、多根清史が言っているように、「諸事情を鑑みると食糧問題が起こることはない」とするのは、頷けない。

食糧争奪戦になるのは、必至だからだ。

現代のコルヌコピアである、ハーバー・ボッシュ法で空気中から、窒素を取り出している。事実上、化石燃料を化学肥料に置換している。化石燃料は遅かれ早かれ枯渇するのだから、食糧危機は遅かれ早かれ起こるということだ。

さらには、雑誌「サピオ」では食糧争奪戦が近未来に起こる、という特集を組んでいる。

こうした雑誌の特集は、必ずしも、未来予測があたるとは限らない。

逆に言えば、それは農業にあてはまることでもある。

荒川弘が言っているように、農業は「どんなに計算を立てたとしても、台風ひとつでダメになる」という、自然現象に左右されている。第一次産業の農業は、工業生産品のように、ライン通りに生産できるものではない。

天候不順による食糧危機は、起こって当たり前と留意した方がいい。

面白いことに、日本の金融資産は1600兆円あると言われる。それをドルに換算すると20兆ドルになる。作中と同じ数字になる。この資産を、金融市場に投入して、一国の経済の首下を掴むというのは、できるけど、できない。なぜなら、これはたとえだが「経済による自爆テロ」だから。

西田氏(西田の思想的モデルは北一輝とされているそうだ)のような、困窮によって精神を取り戻すような帰結に導かれることが信じられるから、行える。(論語の「衣食足りて礼節を知る」とは反対の考えである)

このような、経済の問題の摩擦によって引き起こされる戦争は、岡田司斗夫・著『「世界征服」は可能か?』によって裏付けられている。全てが全て、一概には言えないが、少なくとも米の南北戦争については、そうであったといえる。

ところが、これは90年代までの話になる。9.11でネーション対ネーションの戦争は終わった。だから、『機動戦士ガンダムOO』の超国家グループ対超国家グループの覇権争いになる。

すると、経済圏の対立ではない、何とも言いがたい、「テロとの戦い」とも言えない戦争が起こる。その混沌さは、並の人間には予測(類推)できない。だから、『OO』はガンダムによる戦争の介入という、わかりやすいものを提示しなければならなかったのではないだろうか。

話は戻る。

『ガサラギ』が北アフリカの長期独裁政権がジャスミン革命によるドミノ倒しで倒れることを予測できていれば、アニメソフトの中で『沈黙の艦隊』と同程度の評価はされていただろう。

予測とは違うけれど、カダフィがデモ隊を戦闘機で銃撃させたように、暴動をタクティカルアーマーで鎮圧するシーンなどがある。国民を守るはずの自衛隊が、現行政府を守るために動かされるという、「これがシビリアン・コントロールかっ！」などのエピソードがある。

『沈黙の艦隊』がポリティカル・フィクションとして90年代をシミュレーションした。『ガサラギ』は作中の時代である今の年代をシミュレーションできていたかが、再評価のカギとなるだろうが、それは無茶があるだろう。

ただ、引用素材としては、それなりに評価されても、いいのではないかと思える。なぜなら、引用は全文引用をしなくていい。部分のみで成り立つからだ。

全体を評価する総合点は、お世辞にもいいとはいえない。

「このバランスの悪さ」だけを読むと、結構いいアニメに思えるが、それは評価できる部分しか、書いていないからだ。通しで観たら、退屈な部分もある。

つまり、前述した評価は変わらないの「戦争アニメとしてならそれなりに評価できるが、エヴァフォロアーとしてはまったく評価できない」という、レビューで書いたとおりである。(エヴァフォロアーとして評価できるのは『蒼穹のファフナー』があげられる)

この評価が変わるときが来るのだろうか？ 果たして。

2011.4.5 アップ

広告

The man of the overlooking 01~06

ピカレスク
マジシャンズ
ロマン

Architecture Product System

ブックログのpapier

各巻 ¥50

アニメレビュー このバランスの悪さ 『ガサラギ』

<http://p.booklog.jp/book/23921>

著者：ゴトチヒ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gotochih1980/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/23921>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/23921>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

NO ITAMINA

REVIEW

ち悪のズレハのニ

ズトニセ 『チニセ』

コチニ